

共生の環はさらに広がる－第3回共生のひろば総評

岩槻 邦男
(ひとはく館長)

2月11日と日を定めた共生のひろばが、2008年もにぎわいを見せました。

ユネスコの会合でスペインへ行っていたわたしは、最後の現地調査には参加せず、共生のひろばに間に合うように帰国しました。おかげで、時差の影響をものに受けてはいましたが、第3回目も共生のひろばはおおいに楽しませていただきました。ひとはくの、共生の環を拡げる試みは、見事に結実しつつあることを実感しました。



前2回は大セミナー室いっぱいの参加者の活気で、終日熱気に満ちていましたが、3回目の今年は、ついに大セミナー室では収まりきれない数のたくさんの人たちからの申し込みがありました。会場はホロンピアホールに移すことになりました。しかし、この大ホールは、もともと講演会、演奏会のためのホールですから、たくさんの人は収容できても、語り手と聞き手の間のスキンシップを維持するのにふさわしい場所ではありません。そこで、演壇は使わず、語り手も床のレベルで話をする形式をとるなど、舞台装置にも気配りがなされました。IT時代ということで、映像等は揃えられ、学会発表のような雰囲気もありましたが、事前に取り越し苦労をした心配などは完全に吹き飛ばすように、語り手は準備された発表を淡々と、あるいは熱気をこめてこなし、聞き手はどの話題にもぐんぐん惹き込まれていきました。見事に共生のひろばが展開されていきました。

口頭発表だけではなく、ポスターもそれぞれに工夫され、立体的な展示もあって、楽しいものでした。もっともゆっくり学習しようと説明文に正面から取り組んでいたら、横から説明の言葉をかけられたりするのには閉口もしましたが、これも発表者の意欲の現れかなと見せていただいております。ポスター会場は階が2段に別れてしまいましたが、どこも和やかで生き生きした雰囲気に満たされていました。

共生のひろばに参加した個々のグループは、個別にひとはくのスタッフの支援を得て、それぞれの課題に向かって学習の芽を上げ、伸ばしています。しかし、個別に設定されているそれぞれの課題の間には共通した志向が見られます。自分の科学的好奇心に基づき、よりよい人間環境の創成に向けて、前向きな学習を推進している点で、全ての人とグループが前向きな歩みを運んでいるのです。共生のひろばで情報交流を行うことによって、お互いの課題のよさをつなぎあわせて、統合的な歩みが生まれてくるのも目の前のことのように思えるところです。総評の際にも使った例示ですが、口頭発表のいくつかをつないで、何年かたつと「ルンルンプラザに、OBであるテネラルのメンバーも集まり、みんながシッチのマークのついたTシャツを着て、地元産の動植物の入った大鍋をつつく」すがたが見えてくるのではないかと、そんなイメージが浮かんできます。

岸本さんの紹介の中で、子供たちの学びのこころを惹き出す、というようないい方がありました。(正確な記録にはなっておらず、わたしが勝手にそう聞いてしまったのかもしれませんが

が、話の流れを、そうとらえました。)日本は、鎖国の扉を開いた明治維新の時以来、すばらしいものに見えた西欧の文明に、追いつけ、追い越せと、教育の体制を整え、100年経ったら見事に追い越してしまいました。世界でもっとも豊かな国に成長し、物質・エネルギー志向の豊かさを満喫するようになりました。(もっとも、それでみんなが幸せになったかどうかは別の話です。)そのために、日本の教育は、「教育」という言葉で勉強を強いてきました。教育は、教える主体が教えられる客体を教える主体の望む方向に導く行為、と定義されます。education という英語は、引き出す、という言葉で、教えられる客体の能力を引き出す行為、と定義されます。educationの日本語訳が教育であるとされますが、上に簡単に紹介したように、これらは正確に対応する言葉ではありません。だいたい、勉強という言葉は強いて勉めると書きます。楽しいことでない、言葉で表現しているのです。確かに、遅れている知育を整えるためには、歯を食いしばって「勉強」する場面も必要になります。しかし、学びは元来楽しいものでなければなりません。楽しい学習ごっこをすることが、人の生きるよろこびの根源であるはずです。ある場面では勉強も必要でしょうが、学びは楽しく展開される方が望ましいに違いありません。

博物館は学習ごっこが展開する場所です。それは怠惰な娯楽と違い、人間らしい知的なよろこびを開発する場所です。その意味で、共生のひろばは人間らしい学びのよろこびを共有する場を設定することに、もう確実な成果をあげようになったといえます。

もう今から来年の2月11日が楽しみです。その日に、最高のプレゼンテーションができるように、今日から準備をはじめたいものです。